MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．９．２３　発行元
第 399 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ライト文芸ミステリ最新刊から

最近出版されたライト文芸ミステリの本を４冊取り上げる。毎回本選びで苦労する。この分野は現在頭打ちの状態。出版しさえすればよい…風の流れが感じられる。もう少し責任を持ってほしいような…。

もう少し実力を伴った作品を…

新刊書店の店頭て悩むことが多い。新しい作家の作品を多くの人に紹介したいと願って本を見ているのだが、「これは!」と思うものに出会わないのだ。なんとかミステリらしき本を手に取っても、「ミステリの本質」を理解して書いているとは思えないようなものばかり。

「ちょっと売れればいいや」「若者の目を引く」という目先のねらいだけが表に出ている。もう少し中身に責任を持ってほしいのだが。「猫」「モフモフ」「あやかし」「妖怪」などのブームに流されないことが大事なのではないか。

そういう意味で私は現在の「キャラクター小説」の方向性に疑問を持っている。特異な人物だけが注目を浴びるのは間違っている。イケメンキャラを求めるのはやめよう。平凡に、目立たずに生きている人の方がずっと大切。多様性の尊重が叫ばれている今日、その考えに沿った価値観が重要なのだと思う。

芥生夢子『大正銀座ウソつき推理録　文豪探偵・兎田谷朔と架空の事件簿』

７月にアルファポリス文庫から出た本。（初めて手に取る文庫）　一見キャラクター小説のように見える。探偵小説作家で探偵事務所も開いている兎田谷朔が探偵役。ぐうたらな性格のように描いてある。ある男爵家の殺人？？事件の解決を依頼されるのがテーマ。前半はもたもたした感じで少し持て余す。後半からはミステリの作りになり、どんでん返しも用意されている。あるトリックも使われている。書き手は知識も含めてそれなりに実力を持っているように見受けられるが、全体的に整理が必要のように思う。読みやすく、わかりやすく。暗号を含めて、妥当性がほしい。

愁堂れな『先輩と僕 総務部社内公安課』

７月に角川文庫のキャラクター小説として出たもの。少しでもミステリに近いものをと思って読んでみたが…。主人公は総合商社・藤菱商事に入社したばかりの宗正義人。なぜか希望とはかけ離れた総務部第三課に配属された。連れていかれたのは巨大なビルの地下にある部署。最初の仕事は、各階に事務用品を配ること。でも、この仕事には秘密があって…。折しも社内不正による自殺者が昨年出たばかりで、秘密の「社内公安」が必要になったのだという。新人君はその役目を果たすことができるのか。ストーリーは全くの予想通りの展開で、特段の目新しさはなかった。キャラクター…どうだろう。「先輩」がもう少し生かされると良かったかな。

七月隆文『ケーキ王子の名推理6』

８月新潮文庫ｎｅｘから出た本。シリーズ６冊目。表紙の絵も第一話の『アドベントカレンダー』もクリスマスをテーマにしたもの。未羽と颯人の関係は順調で、少し早いクリスマス・プレゼントは数日つきの小さなボックスが並んだ赤い木箱。12 月 1 日から毎日ひとつ開けていくたびにちょっとしたプレゼントが取り出せるというアイテム。そして最後のボックスに収められていたものは…の流れ。楽しく読める。「名推理」と題名にはあるけれどもミステリの味はほとんどない。キャラクター小説としてのストーリーを堪能すればの形。人気本には違いないが、あと一歩の深まりを…。最終話の『ポン・ヌフ』では、未羽の新しい挑戦が始まる。

望月麻衣『京都船岡山アストロロジー』

昨年１０月に講談社文庫から出た新シリーズ。今年の７月に２巻目の『星と創作のアンサンブル』が出ている。「astronomy アストロノミー」が天文学。「アストロロジー」は占星術。古代では境界線は曖昧だったが現在は明らかに異質のもの。私は中学生・高校生の頃は天文学者を目指していた。だから「アストロ…」と聞くとつい引っ張られてしまう。理科の教員になってからは「科学」を伝えることを仕事としてきた。「星占い・占星術」はあくまでも物語の中に登場する話として理解している。本書では大きなテーマになっているが…。

主人公は大手出版社・耕書出版に就職した高屋誠という若者。中高生向け占い雑誌『ルナノート』の編集部配属される。大阪支所勤務。「占い」に悪感情を持っている高屋は、京都の船岡山珈琲店にいる覆面占い師と取材中に衝突してしまう。そこから、書店・珈琲店の人達と交流がうまれ、それまで抱えていたモヤモヤとした悩み事を少しずつ解きほぐしていくことができるようになっていく物語。